

## 報告「部落史研究における身分・階級・物語・コモンズ」

友常勉（東京外国語大学）

### 1、部落・部落民アイデンティティ論と部落民形成論——言語論的転回の反映として

i 近代部落史における部落・部落民アイデンティティ論はむしろ部落民形成論といえる。

〔関口 2007〕では初期水平社運動における自己定義が、「民族」「階級」から「身分」へと推移する過程がしめされている。〔関口 2010〕ではマルクス主義における「階級」概念の翻訳・定義を介して、部落・部落民の定義が「民族」から「身分」へと推移する過程がしめられる。これらは学知や訳語をとおして、集団の共通感覚にみあった部落の自己定義を模索する過程である。制度的知と共同体あるいは集団の共通感覚との合致が「身分」という概念におさまる過程でもある。近代における被差別部落の自己定義は学知、部落の共通感覚、政策的契機によって合成される。ただしその合成を規定しているのは部落の自己形成の衝動である。

ii 自己形成の衝動は第一に国民国家の圧力によって生じる。

〔今西 2009〕の研究史の整理では、国民国家形成のもとでの国民化と部落の言説・表象の推移とが結びつけられる。〔ひろた 2009〕では国民化はまた「帝国意識」につながると論じられる。言語と表象、さらにそのレトリカルな差異化の戦略がアイデンティティを規定していくという把握には言語論的転回が反映している。

iii 部落民形成論と〈同化／異化〉のパラダイムとの関係

藤野豊の水平運動研究の批判的摂取、秋定嘉和の水平社・融和運動論の継承をふまえて、〔朝治 2009〕は「戦時体制と部落」について、水平運動・融和運動・翼賛運動それぞれが部落の固有の論理に沿っていたこと、総力戦体制下での「国民一致」は「矛盾に満ちたもの」（朝治、前掲、287頁）を主張している。水平社運動の戦争責任論も、戦時体制と部落の実情との相克を分析しながら問題にすべきであるということであろう。〔黒川 1999〕の「同化／異化」論をひねっていえば、〈同化的異化〉〈異化的異化〉とすべきということになる（私の議論でいえばより存在論的な動揺としての〈不和〉〔友常 2011〕）。

iv 自己形成論の文脈

自己形成論の視角は、狭義のアイデンティティ論ではない。むしろ E. P. トムスン『イングランド労働者階級の形成』（青弓社、2003年）で論じられた、共同体的でコモンズ的な慣行・共通感覚・経験をとおした〈階級〉形成論に重なる。わかりやすい例はこうである。マルクス・エンゲルスによる 1848 年の『共産党宣言』（共産主義者同盟綱領）の英訳は（チャーティスト運動に活発に関わっていた）スコットランド人の Helen Macfarlane によっておこなわれたが（1850年、Red Republican というイギリスの社会主義新聞）、その際、冒頭の「共産主義という幽霊」の「Gespensst [現在の英訳では spectre]」は（スコットランド民話によく出てくる）hobgoblin（＝ゴブリン、子鬼のような妖怪）と訳された（David Black, *Helen Macfarlane: A Feminist, Revolutionary Journalist, and Philosopher in Mid-Nineteenth-Century England*. Lexington Books, Oxford, 2004）。

自身を定義する言葉の選択は慣行や経験、共通感覚に沿っておこなわれる。水平社によ

る部落民論が最終的に「身分」に定着していくことの根拠もそこにあるだろう。

## 2、身分論との接合

身分的周縁論に対する批判から、藪田貫・深谷克己らによるシリーズ『〈江戸〉の人と身分』が刊行されている。〔安国 2010〕は貨幣をモノと身分との結びつきから理解する。「儀礼的貨幣」「身分的財」など。〔柳谷 2011〕はジェンダーにおいても「女の身分」概念の可能性を提起し、〔深谷 2011〕は階級よりも「身分」概念の通時代性、普遍性を主張する。身分概念はまた「表象概念」として把握される（深谷、同上、211 頁）。「所有」「階級」などの概念の使用がそのままでは東アジアないし日本の——今日においても——共通感覚からずれてしまうという理解である。

一連の身分論の提起はかつての部落史の成果によってもたらされ、今また近世史に還流し、部落史に逆提起されている。そのような視点が近世部落史研究には希薄である。ただし旦那場研究をふまえた〔藤沢 2009〕は峯岸賢太郎の「勸進共同体」、「関係性の所有」としての旦那場論の意義を指摘することで、身分論の重要性を主張している（ただしここでの「所有」概念も検討に付される必要がある——後述）。これを被差別民のネットワークの生産・再生産論と考えれば、被差別民の共同体論・産業論に接続される（〔水平社歴史館 1996〕〔友常 2003〕）。

## 3、反資本の視点

身分論に反資本の視点が必要であることを提起しておきたい。1970 年代以降、イタリアのアウトノミア運動を出自として、反資本のコモンズ論の潮流が形成されてきた。重要なのは原始的＝本源的蓄積を、膨大な不払い労働領域の創出と不可分であると理解することである。そうした潮流を現在、代表しているシルヴィア・フェデリッチの『キャリバンと魔女——女性、身体、原始的蓄積』（Silvia Federici, *Caliban and the Witch: Women, The Body and Primitive Accumulation*, Autonomedia, 2004. 未翻訳）の議論を参照する。

フェデリッチは、西洋社会における〈魔女狩り〉が、資本主義の形成、とりわけ原始的蓄積にとって決定的な意味を持っていたとする。魔女狩りがピークに達する 1580～1630 年はイギリスの第一次エンクロージャーの時期に重なる。同時にこれはアメリカ大陸で植民地化・奴隷労働が進行した時期でもある。フェデリッチによれば、これは女性を産む性＝労働力の再生産の手段とするための女性身体の〈エンクロージャー〉である。〈魔女狩り〉とは、近代的労働力の生産と再生産の社会的基盤を創出するために、女性の反資本主義的、反労働力再生産的な身体性を圧迫することに目的があったと、フェデリッチはいう。一揆や民衆暴動に進んで参加し、家父長的秩序を受け入れない女性の行為、さらに異性愛原理を拒否する振る舞いを弾圧するために、異教を信奉し、男を誘惑する〈魔女〉という表象がつくられる。それによって不払い労働が合理化され、労働力の生産・再生産が無償化・非可視化される。しかもこうした〈魔女〉のイメージは、植民地における先住民支配やプランテーション経営においても機能していた。植民地アメリカにおける先住民や奴隷としてアフリカから移送された人びとは異教の信仰と習俗を信奉する悪魔＝キャリバンとみなされ、キリスト教化の対象とされたからである。この植民地化とキリスト教化は〈魔女狩り

り) とほぼ重なって進行し、資本主義の原始的蓄積を果たしたのである。女性と先住民の身体、土地、労働の植民地化とキリスト教化＝近代的労働力のための規律化・規範化は、今日のグローバリゼーションの過程で日々発生していることである。

翻って同時代の日本で連想されるのは、1637年の島原の一揆とその前後に成立してくる宗門改め制度と、その人口管理政策による単婚小家族の形成である。農民に土地の占有と自由な耕作が保障される代わりに、女性の性別役割分業の固定化(「女の身分」化)が進んでいく(〔柳谷、前掲〕)。他方、中世の寺社権門が、近世には宗門人別制度を支える出先機関となり、武家政権の支配の手段に転換したのにもない、寺社に帰属していた宗教的芸能民はその正統性を失っていく。さらに、17世紀後半の生類憐みの令のような武家政権の仁政イデオロギーによる統治や、服忌令の改編によって、ケガレ意識と殺生への忌避が昂じる(〔横田 2009 (原本は 2002)〕)。

近世初頭の農業中心的な家父長制的〈家〉の制度化——「華夷良賤」にもとづく身分序列、〈良民〉という労働力の創出、すなわち膨大な不払い労働領域の創出——は、日本における資本の原始的蓄積である。単婚小家族の成立と「女の身分」化、近世賤民制度の確立を日本近世における〈魔女〉と〈キャリバン〉の創出の嚆矢と理解してはどうか。

上記の本源的蓄積論をふまえて、明治初頭の地租改正から解放令の意味を明らかにした上杉聡の議論を〔上杉 2009〕再解釈すると、解放令とは部落の共有財(あるいは身分的財)に対するエンクロージャー＝囲い込み運動に他ならない。

囲い込みの対象となるのはコモンズ(入会地、共有財)である。網野善彦の「無縁」、檀那場、「勸進共同体」もまたコモンズである。それは寺社に服属し、あるいは村落共同体に服属する。それは排外的な性格を持つ。しかし慣行や祭礼、祝祭空間である。旦那場の慣行が商品経済の論理に浸食されるように、また恩頼的なネットワークがそのまま親方-子方のヒエラルキーによる収奪の場になるように、コモンズは本源的蓄積のリソースとなる。部落の旦那場の呪術性や穢れのタブーは不払い労働の領域でなければならなくなる。しかしまたコモンズは本源的蓄積に対抗する慣行の領域でもある。そうした慣行(旧慣)や、人とモノとの呪的関係、資本制との葛藤・抵抗の関係を包摂していることで、コモンズは〈身分〉という概念をよりどころとする。

#### 4、物語論

赤坂憲雄・兵藤裕己・山本ひろ子編『物語・差別・天皇制』(五月社 1985年)

##### ① 物語論

上記に収録された論文を導入にして、1980年代に物語論研究からなされたアプローチを検討。まず、説経節研究や〈異神〉論があつかう、中世後期から近世初頭の民間宗教と被差別民の世界の構想力について。ここには折口信夫の芸能論の批判的継承と、70年代までの〈漂泊〉概念の内実の転換があった。以後、山本ひろ子『異神』(平凡社、のちにちくま文庫)や兵藤裕己『琵琶法師』(岩波書店)などの研究につながる。この時期の中上健次の関与も重要。

ただし、薦田治子「書評・『琵琶法師』」(演劇学 17号 2010.3)のように中世被差別民世

界のロマン化がもたらした研究上の難点についても留意する。

さらに、山本ひろ子〈異神〉論と服部幸雄「服部幸雄「後戸の神——芸能神信仰に関する一考察」（文学、41巻7号、1973年7月）」（『宿神論』、岩波書店、所収）のあいだの論争にも目を配る。なおこの論点については山本「摩多羅神紀行、あるいは服部幸雄『宿神論』の彼方へ」（文学、10巻4号、2009年7・8月）を参照。

また、そうした物語論が提起した河原巻物論や長吏由来書論、白山信仰への問題提起について再検討。これは今日まったく顧みられていない。その際に、吉田栄治郎による一連の夙研究や、各地の地域部落史研究の「様々な被差別民」研究の現在も参照する。ただしここには、村落史料にもとづく実証の進展に対して、説経節や祭文研究などが論じていた被差別民の構想力についての議論の立ち遅れという研究上のズレがみられるのではないかと提起。

物語論・芸能論と差別論という観点から、白山信仰、夙・宿とならぶ重要な論点は〈翁〉。これについては愛知県奥三河の花祭の「翁」にみる被差別民的性格を指摘した乾武俊『黒い翁』（解放出版社）の問題提起を参照。これは中沢新一の『精霊の王』（講談社）によって提起され、一世を風靡した観のある金春禅竹「明宿集」（もとは明翁集＝翁を明らかにする書のこと）を差別論からどう取り組むかにかかわる。

## ② 河原巻物について

「Ⅲ、河原巻物の縁起的構想力をめぐって（山本ひろ子）」

「従来の差別論というのは実体論的な分析ないし、象徴論的な分析が大勢を占めていたと思うんです。前者は歴史主義的な事実の把握、後者は文化人類学なんかに代表的だと思うんですが、…やっぱり食い足りない思いがあったわけです」（前掲『物語・差別・天皇制』59）

『長吏由来記』の対抗的構想力

「…江戸時代に差別が完全に制度として固められる、つまり職業や家筋あるいは共同体そのものとして再生産されてくるといった、どうしようもない形のなかで、差別の秩序体系に物語として揺さぶりをかけるといいますか、物語の揺り返しみたいなものによって、現実を合理化しようとする、あるいは正統化しようとするといった情動がみえてくる」（同上61）

「河原巻物では主人公はズバリ異人として出てくる。つまり生えぬきの日本人、定住民、常民といったものとは無縁の異人として登場するわけです。そこで放浪の契機ですが、主人公である異人がなぜ放浪しなければならなかったかということを考えてみますと、…王権と不可分の罪というふうにはなっていないんです」（同上63）

対抗的構想力の形象としての〈異神〉の群れ

「（河原巻物の神々の二つのグループのうち、第一は）八幡 - 住吉 - 蛭子という一つの流される母子神話の連鎖がみえてくるわけで、こういうものが河原巻物の主要なモチーフを形造っているのは、偶然やまた、単なる知識の問題に還元できないだろうと思います」

「第二のグループとして抽出できる神々は、牛頭天王、八王子、五帝龍王、磐固大王、蛇毒氣神、土公神、堅牢地神、といったような、つまり中世から近世にかけて、神樂の祭文、盲僧の地神経で語られるような、一つの闇の世界、強烈な神威を奮う異神の群れといえます…当時は非常に恐れられ信仰された神であって、共同体を超出する神々であるといえましょう」(同上 63 - 65)

「言ってみれば完全に非記紀神話的な神なわけです。…記紀の神統譜の神々は、国家を中心に考えるならば宗廟社稷神、天神地神、国家神、王都守護といったような一つの系例をなしているのに対して、ここでの神々は〈蕃神〉であり、〈地神〉である。いわば時間空間を管掌し領導する神ですから、世界秩序の産出者でもあり、時には秩序の破壊者としても機能する…また祇園社の牛頭天王は障碍神であり行疫神である。疫神であるがゆえに逆に病気を治すという再生の力がある…こういう両価性はまさしくこれらの神信仰を担う人々の存在構造を浮彫にします」(同上 65 - 66)

「いってみれば第一、第二グループとも、いってみれば反中央的な性格で、国家神に服属したり、共同体秩序に組みこまれない神々として見ることができる」(同上 66)

#### 天皇権力の逆転

「『長吏由来記』では) …在俗信者による葬儀の執行関与と舍利の分配といった事跡から、自らの〈長吏〉という職掌の由来を解き明かす、という形にしている…天皇から職業の独占権や免税権を与えられたという中世の由緒書の内実を飛び越しているわけです…このことは天皇はいつからか〈死〉から疎外されてしまったという経緯とも無縁ではないでしょう」(同上 67)

「長吏は特権としては、お寺でのいろんな法会とか講が行われた時の供具や供物、道具なんかの払下げを求めるわけですがけれども、そういう得分の正当性の物語的根拠を、この積尊入滅譚の最後の舍利の分配に求めている。盲神の地神経と共通するモチーフになっています。／こうして見てきますと物語の定型としての王権物語といったものから大きく隔たった地平に河原巻物の世界がある」(同上 68)

「V 浄化と再生の構造 差別論への一視角」 ⇒あるいは賤民の対抗的構想力のトポスとしての〈説経節〉

#### 白山信仰・受容にみる説経節的な対抗的構想力

「被差別部落の多くが、なぜ白山神を祀っているのかという問題は…要するに白山比咩(シラヤマビメ)は浄化の女神であるという点がポイントでしょう。その場合、白山という山に入ること自体が浄化という機能を果たしているともいえるんです。『白山大鏡』という修験が関与したらしい史料をみますと、白山へ至る加賀、美濃、越前の三つの禪定道には、三途の河が流れ、死出の山があり、冥官である五道の大神も存在しています。そうしたポイントを幾つも越えて、山頂に至るということは、まさに地獄を通過し、擬死を体験することで、白山という浄土へ入ることを意味するわけです。白山自体が冥界であり、異空間であって、〈死〉を媒介することで成り立つ浄土であります」(同上 101)

「文化とは差異の体系だとすれば、差異が差別へと転化するプロセスに、おそらく天皇なり被差別民への制度としてのタブーが立ちあらわれる位相があるのだと思います。けれど同時に、そのタブーの形成は先の河原巻物にみられる縁起的構想力や、神楽や葬儀という死と再生行事の執行のように、新たな文化的力の喚起・生成でもあるわけで、その〈忌む - 忌まれる〉の弁証法的な関係にもう一つの文化史もしくは精神史の系譜がみえてくるのではないのでしょうか」(同上 106 - 107)

「〈物語〉のトポスと交通 日吉社大宮縁起と説経『愛護の若』と河原巻物をつなぐもの」  
「あらかじめ仮説するならば『愛護の若』は日吉社大宮縁起と叡山所生の児物語と近江の被差別民の伝承という物語空間のパースペクティブにおいてしか読み解けないと言えるだろう」(同上 279)

「愛護の物語の構造とは、…叡山にゆかりの児物語の主人公は叡山を発祥の地とする靈童であって、その靈童を育み庇護するのは、僧侶であり、異類(とりわけ山王の猿)であり、時には神であった。…それは貴人流離譚の物語の範型には収まりきれぬ叡山所生の児物語と児信仰の習いを受けついでいるともいえよう。このことは、児の存在構造の両個性——庇護する者(神)と庇護されるもの(弱者)——として新たな問題を喚起するものである。…かくして愛護の物語の原型は、都 - 大津 - 粟津 - 唐崎 - 坂本をルートとする大宮鎮座縁起と叡山の“浄土”神蔵寺一帯の龍神信仰を源流としながら生成されたものとすることができよう。前者からは湖族ともいべき漁民、職能民たちの、後者からは聖地に止住する修行僧や巡礼者たちの群像がかいまみえてくる。そしてこれら二つのトポロジーは、貴人の流離と受難という主題において連環し、巡礼という行道において交通していた」(同上 299)

## 5、芸能論・差別論から文化知の実践へ

村崎修二による猿舞座と小沢昭一、宮本常一らの大道芸・伝統芸研究とのかかわり。新左翼世代・狭山闘争世代の文化運動の結実である辻本正英による阿波木偶箱廻しを復活する会。これらの文化的実践が政治闘争との関係からみてどのような意味を持っているかを提起。これは文化集団の形成による文化知の創出であり、反差別闘争が生み出した一種の文化革命。その意味で政治闘争とのタイムラグを経て文化革命の運動が部落解放運動の周辺から生まれたといえる。なお、北川鉄夫・第一回芸能大学実行委員会編『佐渡の芸能』(文理閣 1986年)を参照することで、こうした文化革命の思想運動に、網野善彦をはじめとする中世史家たちの深い関与があったことも提起しておきたい。また逆にいえば、そのラディカリズムを定義するためには、80年代の中世社会史の底流にあった反資本・反商品制社会の文化革命論も踏まえる必要がある。